



共同通信



2007年9月15日 133号(343号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://www.koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 33 『カナダで過ごした日々』

日本人がもつカナダのイメージといえば、ロッキー山脈を代表するような大自然であったり、赤毛のアンのプリンスエドワード島、野生動物などといった美しい光景を思い浮かべるかもしれません。私も7年半前、そうしたディスカバリーチャンネル的なイメージを持ち、バックパックと小さなスーツケースをこころがしながらバンクーバーの空港に到着しました。雨がしとしとと降る1月のバンクーバーは重いような寒さで昼間にもかかわらず薄暗く、バスの運転手に降ろされたところはカナダの中でも1番治安の悪いといわれる地域で、まず印象に残ったのがマリファナの臭いでした。値段が安いという

理由だけで、とりあえず近くのホテルに滞在したものの、毎晩悲鳴が聞こえてきたり、使い捨てられた注射器が転がっていたりと環境は最悪。3日目にしてもう惨めな気持ちになり、マクドナルドの安くてまずコーヒーを飲みながら、こんなはずじゃなかった・・・と孤独な気持ちになったことを今でも懐かしく思い出します。そのようにして始まったカナダでの生活ですが、これほどまでに多くの出会いに恵まれ、またその出会いを通して学びと成長の機会が与えられたことは、本当に神様による恵みと導きだと思えます。特に6年半勤めていたL'Arche コミュニティーと私の母教会となったGrandview 1

Calvary Baptist Churchは私に大きな影響を与えるものとなりました。

今回はその出会いの一つでもあるエマニュエルという私の親友を紹介したいと思います。

バンクーバーは非常に国際的な都市で、移民そして難民の方々と接する機会が多いのですが、エマニュエルはアフリカのブルンジ出身で、難民の申請のためバンクーバーに上陸しました。ブルンジは隣の国のルワンダ同様、ツチ族とフツ族の部族間の争いが長く続いている国です。エマニュエルは少数派のツチ族出身、そして奥さんはフツ族出身で、二人はこの部族間に和解をもたらすため日夜働いてきました。しかし、エマニュエルはそのため政治犯として命がねられるようになり、命からがらカナダに逃げてきたのでした。私には想像もつかないような苦労や苦しみ、悲しみを背負っているのですがなぜが喜びに満ちているのです。その純粹でまっすぐな信仰のゆえにどこかイエス様の香りがするのです。共にいるだけで平安と力を得られる方とはいるもので、その人柄のゆえに教会のメンバーが自然に集まってくるようなオアシス的な存在となりました。

そんな時、奥さんの突然の死という思いもかけないニュースがブルンジより届きました。教会員の一同が、彼の奥さんと子供達のカナダでの再会を祈り続けていたので、我々みなショックを受け涙しました。人は成長するにつれ自分のあるがままの姿を隠す傾向にあるようです。多分恐れや不安というものが、自分自身をさらけ出すことを妨げるのかもしれませんが。しかし悲しみの中に見たエマニュエルの信仰の実践は、恐れや不安を超え、あるがままの自分の悲しみを人々と分かち合い、共に泣き、共に祈り、共に賛美し、主にある交わりのなかで慰めを受け、新たな力を得ていくものでした。

ブルンジでの伝統に従い、一週間彼の家の戸は開放され、彼と共に悲しみを共有する場が与えられました。そのエマニュエルの無防備なまでの心の開放に、集った一人ひとりも無防備でいられる安全な場が与えられ、神様と真直ぐに向き合う機会が与えられたのでした。おいしい紅茶やケーキなどで人を迎えるというわけではなく、あるがままの自分が必要とされ、その悲しみや喜びを共有する場を与えられた時、人は本当の意味でのHospitalityを経験する

のだなとエマニュエルとの交流を通して感じたことでした。

エマニュエルを初め、教会を通してたくさんの難民の方々やホームレスの人々と直接交わりがもてたこと、またL'Arche コミュニティーで精神的ハンディキャップを持った人々と共に生活をする経験を通し、カナダという土地のまた違った面を知ることができました。それは雑誌に紹介されるような華やかなものではありませんが、人間の苦悩、そして人間の強さと美しさを垣間見るものでした。バックパックと小さなスーツケースだけでカナダを訪れた私ですが、7年後、語りつくせないほどの人生の宝を得ることができました。こうして得た宝を何かの形で人々にお返ししていく歩みでありたいと願っています。

(ペイトン初穂)

日本基督教団西宮公会教会集会案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公会教会集会室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公会教会礼拝堂
聖日礼拝	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公会教会礼拝堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を読みたい会	毎月第3火曜日午前10時から	於：西宮公会教会集会室

安部晋三の「初め断定なき説明なく」は、実は日本人一般の風潮になかかかって「そであるかを当の「辞めた総理大臣」は自分のどかきけなんだ？」と思えて居た（説明するをなおざりにした「辞めた総理大臣」は説明することをなおざりにして2007年9月11日に辞めてきた）。

（本治）

一つの社会が、その存続に関わるかもしれないこととして、疾病を恐れていたことが、たとえば旧約聖書の「らい病」の記述のこととして読むことができます（レビ記13章、14章「らい病者・ハンセン病者」を社会から排除してきたこの国の歴史は、旧約聖書の時代のそれとそんなに違いはありません）。レビ記には、「らい病」の発見に、それが発見されたときの「対策」のことが、事細かに書かれています。発見し、確認し、認定することが全く一方的というわけではなく、「事細か」であるのは、それなりに慎重であったことを意味しなくはありません。そして、認定された人が社会復帰をする機会を全く閉ざしていたわけではありません（この国で、ハンセン病者に対して取られてきたこの国の隔離政策のほうが、レビ記の記述などよりはるかに社会防衛を優先させていたりします）。祭司のところに行ってからだを見せ、それが癒されていたら、社会復帰は可能で

はあったことが、ルカによる福音書にも書かれています（17章11～19節）。

病者、らい病者として、社会との交流が断たれてしまった時、あらゆる意味でその人たちの生活は難しいものになりました。そうして排除され交流を絶たれた人の訴えを聞き、らい病者たちの「癒した」ことが書かれているのが、ルカによる福音書です。らい病者を癒すということは、そのことのレビ記的な理解ではあり得ないことでした。らい病者と普通の人が出会うことはもちろん、その人たちの「社会復帰」の手助けをするなどということも、起こり得ない事でした。イエスの「癒し」は、社会通念として確立していたことをいくつかの点でくつがえします。「癒す」ことはもちろんですが、そのことの意味を「神をほめたたえる」「信仰」と言ってしまうことも、社会通念の否定につながります。レビ記には、らい病・らい病者のことで、祭司による「立ち合

い”が繰り返し書かれています。らい病が、単なる疾病のこととしてではなく、その社会の宗教的営みと深く関わることとして書かれているのは、その宗教が社会に対して持っていた影響力を意味してもいます。その場合に、決定権をにぎっていたのが祭司でした。ルカによる福音書が描くイエスの時代にも、祭司は影響力・決定権を握っていました。

“癒し”は、その影響力・決定権をおびやかすことになります。更に、そうしておびやかすことを“神をほめたたえる”“信仰”として評価します。らい病者が、それとして認定され、排除されることが、“神をほめたたえる”“信仰”であった社会で、“認定”“排除”を流動化させる働きのこと逆が逆に“神をほめたたえ”“信仰”であると主張するのです。

同時に主張されているのは、一人の人の神格化ではなく、“神をほめたたえる”こと、制度化ではなく、その人によって決断された“信仰”です。

アコーク回一通信(113)

いやあ、今年、本土は猛暑でしたね。私の故郷、仙台も37.2度なんて、沖縄でも経験していません。沖縄は、亜熱帯とはいえ小さな島ですから風のとおりがよく、日陰なら結構過ごしやすいのです。ただし、紫外線の強さは強烈です。日中街中を歩くのは危険です。肌の弱い人なら火傷です。本土から赴任した牧師が教会学校の海水浴を午後2時ごろにしたら顰蹙をかったという話はよく聞くことです。それで、沖縄の行事は夕方から夜が多く、例えば「葬儀」も午後4時とか5時に始まります。

ともかく子供も大人も夜型になってしまうのです。ちなみに、本当に沖縄の少年・少女の深夜徘徊補導率は高いのですが、今年の話は、その中高生たちが飲酒して捕まるニュースが多く、まあ今までたまたま摘発されていなかっただけとの声もあるのですが、警察も学校も、マスコミも躍起になっています。

このところ、沖縄の民俗にも関心が出てきたのです。きっかけは、沖縄大学大学院で、必須科目で「沖縄民俗学」を取らなければならなかったことです。旧来型の社会科学専攻にとってはあまり関心が向かなかった課題です。けれども、考えてみれば、東アジアにおける人間の営みは

農耕作業を中心にして豊作祈願、農作業、雨や風、害虫などの被害とその防止、そして収穫の喜びと感謝、次への祈りと願いの積み重ねです。本土の祭りはそれらが神社や寺の行事となって、個人的には面白くありません。沖縄は、檀家と氏子の歴史がなく、もう少し素朴な宗教です。旧暦と重なり合って、沖縄の小さな集落ごとに様々な行事が行なわれます。沖縄は、かつて米が二回とれる地域だったのと、祖先崇拜が強いので、6月から9月にかけて関連した行事が各地で行なわれます。もちろん、海を中心としたり山を中心とする祭りもあります。

「エイサー」は、近年本土でも見ることができる旧盆の行事です。お盆で帰ってきたご先祖を、湿っぽくではなく、子孫を見守り来年も来てくれるようにと、おにぎやかにお帰りいただく行事です。もともと、沖縄でも本島中部あたりが盛んで、大太鼓を勇壮に打ち叩くコザ系から、独特の衣装の「平敷屋(へしきや)」の優雅さ、「屋慶名(やけな)」の華麗さなどいくつかに分類することができます。HPなどでお確かめください。

今年の夏、私は、本島南部の「南風原(はえばる)」、「大里」の綱引きを10数箇所ほど見ました。農耕

作業の結実が米の収穫であり、わらはその象徴です。本土の神社のしめ縄もその名残りですし、中国大陸から朝鮮を経由して入ってきたのは間違いないでしょう。わらを束ねて縄にし大綱にして引き合うのは本土でも見られますが、沖縄、迫力満点です。共同体の団結確認の行事ですから、勝ち負けの意味、相手に対する対応なども違います。一回勝負、二回、三回の対戦など様々です。血気盛んな若者たちは相手を威嚇し、時にはすさまじい「ケンカ」になることもあります。逆に和気藹々と一回戦勝ったほうが二回目は負けること

になっているところさえあるのです。また、韓国などでは1月の「小正月」あたりにやってその年の豊作を祈る場合が多いのですが、二期作の沖縄は、とりあえず一回目の収穫が終わった夏ごろが盛んです。縄は、縁起物として切って持ち帰るところもあるのですが、災いが付いたものとして海に流すところもあるのです。

コブシを振り上げているのも沖縄ですが、人々はそのような地域の中で歩んでいるのです。ぜひ一度見においでください。

(沖縄 与那原 愛の園 後藤 聡)

くさ～のなかをあるいていたら～

くさ～のなかをあるいていたら～長い長い夏休みも終わって共同幼稚園の二学期がスタートしました。二学期より少し前、8月の終わりから夏期保育が始まっていて、久しぶりに幼稚園にやってきたみんなは1ヶ月会わない間にぐんと背も伸びて、黒く日焼けしている人もいて、見違えるようでした。久しぶりの再会にテンションも高く、『よぉ！ひさしぶりやなぁ』会えて嬉しいのは大人達もですが、それ以上に喜びあっていたのが子ども達です。夏期保育の

間、幼稚園のプールに毎日入って、畑に散歩に行ったり、また、お母さん達による日替わりの美味しいおやつも味わえたりと、スペシャル続きでした。そんな夏期保育の最終日に年長ぐみの子ども達は淡路島へバスに乗って出かけてきました。お天気がすごく心配されたこの日、道中強く降られたりもしましたが、洲本市の大浜海岸に着く頃には小降りになり、みんなが海岸を歩き始めると止んで、またまたミラクル！だったのです。波打ち際を波と追い

かけっこしながら歩くみんなからは『うみだよかわだよ～j&』知らず知らずの間にわらべうたを口ずさんでいた人もいました。手をつないで海に入ったり、カヌーにも乗りました。幼稚園からトラックで運んだカヌーに、2人ずつ子ども達が乗り、大人も2人乗って沖へ向かって漕ぎ、また戻ってくるのです。子どもたちもパドルをしっかりと握って『ヨイショー！ヨイショー！』かけ声とともに力いっぱい漕ぎました。海に出ると海から見た山の緑が綺麗だったのが印象的でした。カヌーに乗ったり、波打ち際で砂山を作ったり、砂浜に埋め合いっこしてみたり、海での時間はあっという間です。海の後、安乎にある平安荘のキャンプ場へ～。着いた途端、虫たちの大歓迎です。『くさーのなかをあるいていたら～みどりのバッタにであったのさ～たちどまるぼくのまえを～ かるがるとよこぎった～ 』みんなが大好きな歌「なつのあいさつ」まさに！です。大きなバッタやカマキリがみんなにビックリして飛び回り、それを追いかける！追いかける！大感激の大興奮のみんなでした。そして、園長先生が用意して下さった竹のお箸をそれぞれがサンドペーパーで磨き、憧れ～でもある公同名物「園長ラー

メン」もいただきました。1日、目一杯遊んだにも関わらずまだまだ元気が有り余ってる？帰りのバスの賑やかさにそう思えた年長ぐみの子ども達だったのです。

何もかも、一つ一つがスペシャルで、だけどいつもの1日として過ごせてしまう子ども達と一緒に過ごしながらも羨ましく感じたりもした1日となりました。

まだまだ暑いと思っていたけれど、頬にあたる風がどこか爽やかで、虫たちの少し寂しげな鳴き声に秋の気配を感じます。秋は秋で楽しい事も盛りだくさんです！子どもたちと、そして、子どもたちとの生活を守って下さるいろんな方々と豊かな時間が過ごせますように…。

(石堂寛子)

私の出会ったいろいろな人たち 3

生きるということは、様々な出会いの連続であるような気がします。人との出会いから、本、映画、音楽など、わたしたちは日々出会いの連続のなかにいるようです。それほどに多くのことがらに囲まれて生活しているのです。

最近、飛行機の機内でひとつの出会いがありました。「ミス ポター」という映画を見ました。ピーターラビットの絵本で有名なビアトリクス・ポターです。わが家にも、ピーターラビットのお皿があります。

今から100年以上前に書かれた世界的ベストセラー作家の物語です。1866年に裕福な家庭に生まれ1902年にピーターラビットの初版を出版、その出版をともにになう出版社の三男であるノーマンとの恋、その彼の死、その後湖水地方での作家生活、自然と共に生活し、印税は開発されようとする土地をまもるためにすべてナショナルトラストの運動につかわれたという、ミス ポターの素朴で美しい生き方が描かれています。昨年、06年は、生誕140年ということでこの映画が企画されたようです。

作者は子供の頃、夏になると家族とともに湖水地方で過ごしたそうです。「ピーターラビットのおはなし」

は、田舎の森できのご狩りや動物との楽しく過ごしたこども時代の生活から、作者におはなしを物語るチカラが育まれてきたように思えます。夏のキャンプや、田舎での思い出などこどもの頃の体験は、心に深くきざまれます。それほどに、大事なもののなのです。

3年前に、友人のすすめもありその湖水地方を訪ねたことがあります。緑の森とながく続く石の壁、湖水に映る古い石の家は、まるで絵葉書の世界です。なだらかな丘の上の彼女が生活したヒルトップの家や、農園、庭などいまもそのままのように保存されています。広大な自然を開発から守り、人と自然の共生を100年以上前から思い実践した作家の生き方が、すばらしいピーターラビットの物語をささえているように思います。以後、ナショナルトラストの運動は世界に広がり、私たちの日本でも展開されています。しかし、村での生活が自然と共にできなくなり人々が村を出、村が崩壊するという限界集落や、田舎の山や田畑が荒れているという現実を目にし、わたしたち人と自然との共生の道をもういちど考えなければならない時ではないでしょうか。

(夏原 秀幸)

大切な贈り物・津門川 61

“川掃除をしよう！”

私が津門川の川掃除に参加するようになって、かれこれ4年近くが過ぎました。参加した当初は、正直、「あんまりキレイな川じゃないな～」とっていました。と言いますのも、私自身、公害問題真っ盛りの70年代に、大阪の豊中市で少年時代を過ごしたこともあり、「街中(まちなか)に流れる川には生活排水が平気で垂れ流されている」という意識が当然のように刷り込まれていたからです。実際、毎月の川掃除で回収されるゴミの量は相当なものであり、いわゆる“自然な”川の状態など都会では望むべくもない、とっていたのです。しかし、先日、いつものように川の中に入ると、小さな魚がいっぱい泳いでいるし、めちゃくちゃキレイなギンヤンマが飛んでいるのを見れたりして、「街中でこういうものが見られるのはスゴイ！」と感動しました。このことは、実際に川の中に入ってみるか、よほど注意して観察しないとわからないことかもしれません。そういう意味でも私にとって月一回の川掃除が、身近な自然とのふれあいになっているのだと思います。

以前から、津門川塾などで、川と人とがもっと身近になればよい、ということで様々なアイデアが提案さ

れています。私自身も、もっと気軽に川の中に入れるような仕掛けができれば良いと思っているのですが、川や池での子どもの事故などが報道されると、どうしても子どもをそういう場所から遠ざけようとする動きが出てしまいます。しかし、本当に必要なことは「池や川で遊ぶときは、こういうことに気をつけて遊べ。」としっかり教えてやることだと思います。そういう手間を惜しんで、というか無視して単純に危険だから近寄らせない、というのでは、子どもは何の感動も経験もないまま大人になってしまいます。

実際に身近にある自然を、自分の手で触れてみて、はじめて人は自然の大切さや豊かさを感じられるのだと思います。そうすれば、川にゴミを捨てるなんて行為も減るんじゃないかとか思うのですが、、、。大上段に“環境教育”とか“エコロジー”とか言う前に「川掃除しよ！」って言うほうが、よっぽど教育的なんじゃないかと思います。

(大藪 朝祥)

2007年9月 あんなこと こんなこと...

- ・1日(日)午前6時30分～、早天祈祷会
- ・3日(月)午前11時～、女性の会
- ・4日(火)午後2時～、教会学校教師会
- ・9日(日)午後5時～午後7時、障害者自立支援法勉強会、於：西宮公会教会集会室
- ・9日(日)～16日(日)近藤広子さん～花とともに～遺作展
- ・11日(火)午前10時～、ゆっくり聖書を読んでみませんか
- ・18日(木)午後2時～、教会学校教師会
- ・29日(土)畑儀文・世界の唄の集り、於：西宮公会教会礼拝堂。
- ・30日(日)午後2時～午後4時、障害者自立支援法勉強会、於：西宮公会教会集会室

にしきた商店街...

- ・9月 2日(日)午後12時30分～“津門川掃除”
- ・9月 20日(木)午後6時30分～、アレキサンダー・シェヴチェンコ(サーシャ)バヤーンコンサート、兵庫県立芸術文化センター・小ホール、入場料1000円。

アートガレーヂ

- ・9月 4、18日(火)野菜市

関西神学塾

- ・9月 7日(金)午後7時～9時 講師 桑原重夫 使徒行伝を読んでみよう(25)
- ・9月 14日(金)午後7時～9時 講師 勝村弘也 ヨブ記を読む(1)
- ・9月 28日(金)午後7時～9時 講師 田川建三 マルコ福音書注解(中)(41)

- ・田川建三『新約聖書・訳と註 第3巻パウロ 書簡その1』7月発行。購入をご希望の方は教会事務所(菅澤)まで。

～畑儀文・世界の唄の集り～

出演：畑儀文

ゲスト：アレキサンダー・シェヴチェンコ

日時：2007年9月29日(土)午後6時～8時

場所：にしきたアートガレーヂ

参加費：4000円(軽食費、飲み物代含む。定員30名)

主催：畑儀文・世界の唄の集り

(連絡先：西宮市南昭和町10-19、にしきたアートガレーヂ
TEL 0798-67-4691)

協力：にしきた街舞台実行委員会 / にしきたアートガレーヂ
/ 花ゆう / 西宮公会教会

教会学校から

《8月の活動報告》

7月30日(月)～8月1日(水)
共同子ども能勢キャンプ

8月4日(土)～8月8日(水)
沖縄キャンプ

8月12日、8月19日は教会学校は夏休みでした。

8月27日(日)
お土産&お土産話パーティー

《9月の活動予定》

9月2日(日)
作って食べる
そうめんチャンプルを食べる
ゴーヤ生かじり大会!

9月9日(日)
ゲーム遊び
キャンプのビデオ上映会

9月16日(日)
ちょっといいこと
甲風園シルバー会の方と過ごす

9月23日(日)
作って遊ぶ

9月30日(日)
ゲーム遊び
とうもろこしについて学ぶ

今月のあ・そ・び “ 沖縄キャンプ ”

7月から8月にかけての、子どもたちの沖縄キャンプでは、その時期が沖縄の“お盆”に重なったり、“夏まつり”に重なったりすることがあります。昨年は“お盆”と重なり沖縄のそれをいろいろ体験することになりました。例えば、今帰仁村のキャンプでは、道路を走っていて、村の売店で“山積み”のゴーヤ、パイナップルを格安で買ったりしますが、お盆にはそれら村の売店が軒並み休みになってしまいます。例えば、お盆には村のエイサー隊の踊っているところに出会うことがあります。お盆の那覇など町の人たちが田舎に帰ります。いつもは空いている名護までの高速道路がお盆と日曜には大渋滞になります。

今年の沖縄キャンプは、今帰仁村や名護市の夏まつりと重なることになりました。今帰仁村の夏まつりは、沖縄に到着した8月4、5日(土、日)でしたが、そこにたどり着いた夕方には、“闘牛”などの行事は終わっていました。キャンプ場に到着して、大急ぎで夕食をすませ、夏まつりの会場に出かけましたが、ステージなどの催しもほとんど終わっていました。その時に、出会ったのが“アキダス”という2人の若い音楽家です。出番の終わった2人がCD

を販売していて、CDと一緒に2人の公演のスケジュール表をもらいました。翌日、今帰仁村に残っていた2人に連絡がついて、キャンプ場での“アキダス”のライブ・コンサートが実現することになりました。19人の“お客さん”(沖縄キャンプの参加者)と、2人の若者の野外コンサートは、歌はもちろんですが、その光景もなかなかいいものでした。ちなみに、その時の野外コンサートの“入場料”はお一人様500円でした。

8月5日の名護市のおまつりは“ハーリー大会”でした。沖縄で漁などに使われていた木造の船を10人のこぎ手で争う競争なのですが、名護市のそれは120チームが出場する壮大なハーリー競争でした。時間の都合で、予選の一部しか見られませんが、“本気”な割りにどこか“手抜き”であるところがおもしろいのです。例えば、ゴールは“秒”を争っているはずなのに、スタートは少なからずバラバラだったりするあたりです。競争で、真剣なんだけど、遊んでいるのです。

つとがわ 編集後記

「老化というのは、『悪性度』がきわめて高い」と書かれていた、“老化の悪性”を、そこそこ突きつけられて生きています（「免疫の意味論」、多田富雄）。食べもの、飲みものに気を付け、運動量も少なくならないようにしていたはずなのに、昨年12月、今年2月に血圧や不整脈などのことで久しぶりに病院のお世話になりました。断続的に歯のことでお世話になっています。夏のキャンプでバランスを崩しひざと腰を痛めてしまいました。腰のほうを一ヵ月後にもう一度痛めてしまいました。しかし、「・・・自己同一性を失ってゆくことによって老化は完成してゆく」とも書かれていましたから、あれこれのことは、“立派”に老化のしるしではあるのです。（K）

7月の終わりから8月にかけて行われた、教会学校の能勢キャンプ。満天!!という程ではなかったけれど、きれいな星空の下でキャンプファイヤーをしたり、みんなで必死になってセミのぬげがらを探したり～と、今年も自然にたくさん触れて、子どもたちといい時間を過ごしました。子どもたちの意外な一面が見られたり、いろんな人との出会いがある2泊3日。来年のキャンプも楽しみです（Y2）

2学期が始まり、子どもたちは夏休みの出来事を必死になって話してくれます。私はこの夏、流星群を見たり、皆既月食を見たりと夜空を楽しんだ夏でした。時間を気にせず、のんびりと星を眺めることが大好きです。流れ星を見たときは感動してしまいました。本当に一瞬だけれど、その一瞬がなんだかとても幸せでした。（N）

8月の初め、沖縄に教会学校の子供達とキャンプに行ってきました。いい出会いが今年も与えられてとても豊かな時間を過ごす事ができました。自然を体で感じた5日間、あの満天の星空と流れ星、今帰仁の海で眺めた朝焼け、自然が作り出した景色にただただ感激でした。目の前に広がる景色に涙する、こんな事ってあるんだなぁと改めて感じました。（I）

履く草鞋がまた増えることがわかった時、老人ホームや老健の施設にいる父たちを訪れる機会が減るだろうから、と決意したこと。週一の絵手紙、訪問は近いほうは週一、遠隔地は月一と自分で決めた。その計画を耳にして孫の家から、「明莉はどのくらいの回数で？」と聞かれてとりあえず週一と答えておいた。達成度は絵手紙50パーセントに満たず、訪問は週一のほうは連れ合いに頼りっぱなし、月一は60パーセントに届かず。孫の保育所迎えは最優先にならざるをえず、100パーセントをはるかに超えての働き。草鞋は一応履き間違えはせず、何とか毎日を過ごし、早や2007年も9月。2008年がすぐそこに！（J）